僕、生きて帰ったら翠屋を継ぐんだ……

綺雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕、生きて帰ったら翠屋を継ぐんだ……

【Ｎコード】
Ｎ７４７９Ｙ

【作者名】
綺雨

【あらすじ】
高町家の次男として生を受けた主人公。妙な前世の記憶を持ちつつも平穏に生きる彼の前に妙なモノが現れる。未来から来たという『彼女』だが、この世界は『彼女』の知る世界とはかなり違うようで……
基本ほのぼの、たまにシリアスっぽい、きっとコメディなお話。

プロローグ（前書き）

初投稿。更新は不定期です。

プロローグ

やはり私のマスターはあの人だけ、か。
最愛のマスターとの別れから数十年。宙空に浮かびながら『彼女』は独りごちた。
幾つもの研究所を転々とし、幾人もの人間が『彼女』を使おうとした。
けれど。
機能ばかりが増えていき、進化し続けた『彼女』の前に、しかし担い手は一向に現れなかった。
その性能の高さゆえに眠りにつくことすら許されず、ただ待ち続けるしかなかった『彼女』。
だけどそれももう終わり。
感情すら持った『彼女』は歓喜に打ち震えていた。
あの役立たず共も今回ばかりは褒めてやってもいいかもしれない。
時間遡行。
本来それは不可能だとされてきた。
しかし先日その概念が覆されたのだ。
といってもたどり着く先は並行世界であり、完全な時間遡行が不可能なことには変わりない。
おまけに開けられる『穴』はせいぜいが拳大ほど。時間旅行など夢のまた夢。
だが『彼女』にはそれで十分。
ブゥゥン！！
システムをハッキングし、実験装置を起動させる。
軽い次元震と共に開き始める『穴』。
研究員たちが気づいて慌てだすが、もう遅い。
『私はマスターに会いにいきます。御機嫌よう、間抜けさんたち♪』

上機嫌な声を最後に『彼女』は姿を消した。

『彼女』の名はレイジングハート。かつてのエースオブエースの愛機。

それは史上初のデバイスの次元犯罪者（？）誕生の瞬間だった。

一章

「はい、じゃあここまでにしましょう」
その言葉に合わせたかのように鐘が鳴る。
四時限目終了の合図。
昼休みだ。
途端、学校全体がざわめきだす。
いい加減慣れてもよさそうなのに。
どうにも懐かしく感じるその気配に、知らず顔を緩ませた。

私立聖祥大附属小学校。それがこの学校の名前。
地元では有名なお金持ち学校である。
ちなみにウチはただの喫茶店。お父さんたち超頑張った。
通い始めて二年以上経つが、本当に小学校か？　と言いたくなる設備にはいまだに驚かされる。
不満があるとしたら給食がないことと、制服のデザイン。
水兵服そのものなのだ。いっそ帽子も付けてくれないか、ってくらい。
女子の制服は凝ってるくせに。
愚痴を言っても仕方がないし、結構な学費が掛かってるからやめる気もないけど。
それに。
「礼也！　行くわよ！」
ここには親友もいる。
振り向いた先には僕の今生初めての友達の一人。
長く伸ばした髪は金糸のように煌き、白人系の色素の薄い肌は滑らかでまるで白磁。幼いながらも愛らしく整った顔には、エメラルドを嵌め込んだが如き瞳が勝気な光を放っている。
我ながら身贔屓の入りまくった描写だと思うが、それを抜きにし

ても類稀な美少女だ。
アリサ・バニングス。
アメリカ人の実業家を父に持つ、正真正銘のお嬢さま。
中流以上の家庭の子女が揃うこの学校でもぶっちぎりのお金持ちなのだ。
どれくらいかって言うと専属の執事が付くレベル。最初知った時は驚きを通り越して呆れてしまった。
そんな感じで育ちにはとんでもなく違いがあるものの、なんだかんだで二年付き合いが続いている。
「今日も屋上？」
檸檬色の弁当包みを取り出し聞いてみる。答えは分かってるけど。
「もちろん。よく晴れてるし、席とられないように急ぐわよ」
「はいはい」
この子と弁当を食べるようになってから、屋上でしか食べたことがない。雨の日は除く。

「相変わらずアンタの弁当って豪華よねぇ」
女の子らしい小さ目の弁当箱に敷き詰められたご飯をぱくつきながらアリサが呆れたような声を出す。
屋上にいくつも設置してあるベンチ。その一つに仲良く座って食事中。
「あはは。なんかいつも張り合っちゃってね。今日なんか早く目が覚めたから特に」
僕の手元には二つ弁当箱がある。二段の上下とかではない。単純に二人前。
理由は結構しょーもない。
「黒い方がアンタのだっけ？　桃子さんのは分かるけど、なんでアンタがそんなに料理できんのよ……」
「練習すれば誰でもできるって」
できるかー！　とか叫んでるアリサは置いといて。

お母さんと僕。実は二人で別々に作っているのだ。ちなみに黒い弁当箱が僕作。赤い弁当箱がお母さん作である。
お母さん、高町桃子はウチで経営している喫茶店『翠屋』のパティシエさん。お母さんのお菓子を求めて遠方からもお客さんが来るほどで、特にシュークリームは絶品だ。
お菓子作りが本業のお母さんだけど、店で出す軽食まで作るだけあって料理の腕前も一流。
そんなお母さんが作ってくれるというのだから任せておけばいいのだけど。
店の準備もあるお母さんはすごく忙しいのだ。だから料理は得意な僕が自分で作ることにしたのである。
しかしそれで納得しないのがお母さん。
礼也のお弁当はお母さんが作るの！　とか言い出して。
それから何をどう間違ったのか、どっちが美味しくできるか勝負だ！　って謎の超展開になった。
そのせいで今では味はもちろん、栄養バランスに飾り付けまで凝りに凝ったトンデモ弁当ができるように。ただし二つ。カロリー計算してるの意味ないよね。まあ結構運動するからいいんだけど。
「今日はすずかがいないから、ちょっとキツイかなぁ」
「あ、そっか。そういえばすずかが休むのって初めて？」
「だね。あの娘、あれで意外と頑丈だし」
僕のもう一人の友達。月村すずか。
いつもは彼女とアリサに分けながら完食するのだが、今日は風邪でお休みらしい。
五時限目の体育はハードになりそうだ。
ちなみにアリサとすずかと僕で、いつも一緒の仲良しトリオ（他称）の完成である。
……というか僕の場合この二人しか友達いないし。
か、悲しくなんてないんだからね！？
『翠屋』で偶に給仕してるから通りすがりの人によく声かけても

らえるし！
お姉ちゃんの友達とはよく遊ぶし！
……あれは遊ばれてるのか。
顔はかわいいもんねえ。お母さんをそのまま子供にしたみたいな顔だし。
お母さんは美人だ。柔らかい茶色の髪は綺麗だし、十代といっても通じかねない若々しく優しげな美貌。日本人らしからぬ青い瞳だって大好きだ。
自慢のお母さんではあるけど、自分がその美人さんとそっくりとなると微妙な気分になる。髪を短くしたら似合わなすぎて、家族全員から禁止されたし。そりゃ丸刈りのお母さんとか見たくないよね。それ以来僕の髪は首にかかる程度になっている。
お兄ちゃんくらいとまでは言わないけど、もうちょっと男前に生まれたかった。
それはともかく。
「今日の放課後は空いてる？　暇なら一緒にお見舞いに行こうよ」
友達が少ないとその分大事にできるよねっ！　決して負け惜しみなんかじゃない。
「もちろん行くに決まってるでしょ。私だって心配なんだから」
さすが。やっぱりアリサは優しい娘。持つべきものは友、だね。
「よし。移動手段ゲット」
「待てコラ。私の目を見てもう一度言ってみなさい」
「アリサは今日も綺麗だね！」
……恥ずかしいからって無言で殴ることないと思うんだ。

二章

月村邸。
バニングス家の使用人である鮫島さんに送ってもらって、かなり早い時間に着いた。
どこのホテルかと言いたくなるこの洋館がすずかの家なのだ。
月村家はここ海鳴市のみならず、日本全体でも有数の名家だったりする。
「あ、ノエルさん。お久しぶりです」
鮫島さんから連絡がいっていたらしく、メイド長のノエルさんが出迎えてくれた。
フルネームはノエル・E・エーアリヒカイト、だったか。
見た目二十台前半のいかにもできそうなクールビューティー。
前に聞いたが、アリサの憧れの女性の一人らしい。
クールなアリサ……ないな。
お嬢さまとしていろいろと教養は身に付けているし、そう振舞うことはできるだろうが、基本的に彼女は感情家なのである。良くも悪くも。
まあ、今はすずかだ。
「すずかは大丈夫ですか？」
「はい。午後には良くなられて、今は……読書をなさっております」
なんだその妙な間は。元気ならいいけど。
「そうですか。良かったね、アリサ」
長い廊下を歩きながら、さっきから全然しゃべらないアリサに振ってみる。
なんかやけに大人しい。
ノエルさんが出てきたあたりから、それはもう借りてきた猫のように。

僕の後ろに隠れてなんかそわそわしてる。
……あれか？　いきなり好きな人が前に出てきて何言えばいいか分からないっ、とか？　アリサぐらいの歳だったら憧れと好きって区別付きづらいだろうし、ありえるよね！
ちょっと思いついてノエルさんにそっと耳打ちする。
首を傾げながらも頷いてくれた。
「アリサ様」
「ひゃい！？」
ビクゥッ！！　と飛び退るアリサ。なんかすごい反応。
「アリサ様は」今日も大変可愛らしいですね」
「！！！！？？」
あれ、なんか怖がってる？　ちょっと涙目だし。あ、あれか。幸せすぎて怖い、ってやつ。
合ってるかどうかはともかく涙目のアリサが可愛すぎる。
ノエルさんは困ってるけど、もう少しこのままにしておこう。
忍び足ですずかの部屋を目指す。何度も来たので道はバッチリだ。
後ろで礼也さま！？　とか悲鳴が聞こえるけど気にしない。
馬に蹴られたくないしね！

「すずかー、いる？」
無数に並ぶ扉の一つをノックする。
バタバタ！　ゴソゴソ……ドシンッ！　ドタバタ……
待つこと数十秒。
「れ、礼也君こんにちはっ！」
「……そこまであからさまに隠されるとすごい気になるなぁ」
顔真っ赤だし。息荒いし。
「な、何のことかなっ！？」
この娘なかったことにする気だ……
仕方ない。僕も鬼じゃないし、またの機会にしてあげよう。忘れてはあげない。

とりあえずアリサにもしたし人物描写でもするか。
「紫色の綺麗な長い髪をした優しい女の子。目はアメジストみたいで大きくて可愛らしい。今は白い肌が紅潮しててちょっと色っぽい。白いカチューシャがトレードマーク。活発なアリサとは逆にお淑やかなお嬢さまで、今から大学の専攻まで考えてるすごい娘です」
「い、いきなり何言ってるの！？」
カ～～～ッ！　っとさらに顔を赤らめるすずか。なんか爆発しそう。
「いや～今日ね、学校でお友達の紹介をしてみましょう！　っていうのがあったんだ。だからすずかでもやってみた」
いきなりやらないでよぉ、ってまだ顔真っ赤。でも気は逸れたみたい。
「で、何隠したの？」
「それは……っ！　い、言わないよっ！？」
む、残念。いけるかと思ったんだけど。
「もうっ。……それより二人でお見舞いに来てくれたんだよね？　アリサちゃんは？」
「ああ、アリサならノエルさんと百合空間を展開――――」
「しておりませんので悪しからず」
「！！」
どっから出てきたノエルさん。すずかが卒倒しそうになってるじゃないか。
「って、アリサはどうしたんです？」
「アリサ様ならもうすぐいらっしゃいますよ」
つまり置いてきた、と。いつも完璧なメイドのノエルさんにしては珍しい。
すずかもそう思ったのかまた驚き顔になってる。
「それはともかく、礼也様。先程はよくも逃げてくださいましたね？」
……状況把握。

要するにこのメイド様は僕に仕返しに来たわけだ。
くっ、僕は親友の恋路を応援しただけだというのに！　そりゃノエルさんがそっちの気がないのは知ってるけどさっ！
っと、そんなこと言ってる場合じゃない。
「すずか！　お大事にね！　僕はもう帰るから！」
「畏まりました。ではご案内いたします」
「速っ！？　って痛い痛い痛い！　握力何キロあるの！？」
ノエルのキャラが違う、とか呟いてるすずかに恭しく一礼し、踵を返すノエルさん。
前にちょっと昔話したら急に遠慮がなくなったんだよね、この人。
それ自体はうれしいけど、とりあえず右手で拘束した僕の両手を離してくれないだろうか？　骨が砕けそうなんだけど。
「って、待った！　そっち玄関じゃないって！　そっちにあるのはアナタの部屋ー！」
ばたん。

三章

今日はお父さんが監督をしている翠屋ＪＦＣの試合の日。
応援に来てただけだったけど、欠員があったらしく急遽参加することになった。
「試合終了ー！　じゅ、１２－０で翠屋ＪＦＣの勝利！」
……どんまい。

「アンタ、相変わらず大人気ないわね」
喫茶『翠屋』のテラス席にて。
ジャージなんか持ってきてなかったから、普段着のままいつもの三人でお茶。
「いや、僕まだ子供じゃないか」
「そういう問題じゃないわよ」
六得点四アシストという華々しい活躍を見せた僕は、なぜかアリサに呆れられていた。
むー、頑張ったのに。
「だって、アリサとすずかが見てるんだから全力でやらないと」
これが、私の理由！
「そう言ってくれるのは嬉しいけどね。限度ってもんがあるでしょ」
「そうだよぉ。相手チームの人たち、泣いてたよ？」
くっ、すずかまで。
「人は涙の数だけ強くなれるんだ」
「はいはい」
絶品のはずのフルーツケーキはなんだかしょっぱかった。

「今日はありがとな！」
「おかげで助かったよ！」

打ち上げが終わり、サッカー少年たちがぞろぞろと帰りだす。
看板娘（？）として見送る僕にかけられる暖かい言葉の数々。
思わず胸がジーンとなった。
やっぱ僕頑張ったよね！？
アリサたちとは大違いだ。さすがスポーツマン。
一人ウンウンと頷いていると。
「そうだ。お礼にコレやるよ。ただの石だとは思うけど、キレイだろ？」
確か今日のキーパー君だったはず。男の子に青い菱形の宝石みたいな石をもらった。
うん、確かに綺麗だね。
でもなんかいやな予感がするんだけど。
とりあえずお礼を言って観察してみる。
ますます強くなるいやな予感。
「僕のこれ、あんまり外れないんだよなぁ」
……よし、埋めるか。

「動かないで」
家に帰り、貰った石を庭に埋めようとしてたらいきなり女の子にナイフを突き付けられた。
……え？
意味が分からん。っていうかどっから現れたこの娘。ウチの流派の神速どころじゃないぞ。あれも速いけど僕なら辛うじて知覚できるレベル。この娘は瞬間移動してきたようにしか見えん。
「それをどうするつもり？」
それ、ってどれだ。
この石か？
ジェスチャーで尋ねるとコクンと頷く。
改めてみるとこの娘可愛いな。
年齢は同じくらいで中性的な顔立ち。アリサより色が薄い金髪を

後ろで結んでて、目の色はすずかに似てる。
無地の黒いTシャツにジーパンっていう飾り気のない服装だけど、雰囲気に華があって全然野暮ったく見えない。赤い宝玉が付いたネックレスがワンポイント、なんだろうか？
ってそうじゃなかった。
「どうするって……埋める？」
「……埋めるの？」
「うん」
「……なんで？」
「……なんとなく？」
「……そう、なんだ」
なんだこの会話。
この娘、この石が欲しいのか？
それなら刃物で脅したりしないで、素直に言って欲しいんだけど。
「これ、欲しいの？　だったら――――」
『マスター！　やっと会えました！』
あげるよ、と続けようとした言葉は第三者の声に遮られた。
『いやあ、性別が違ったので判断に時間がかかりましたが、間違いないです！　この泥棒猫もたまには役に立ちますね』
「ちょ、酷っ！？　って違う！　何しゃべってるのさ！？」
『うるさいです。この方こそが私のマスターですよ？　跪きなさい』
「なんで！？」
これは、この娘の胸元でピカピカ光ってるネックレスから声が出てるんだろうか？
新型携帯端末？　でもこの娘も驚いてるし……
「えーと、それは？」
わたわたしてる金髪っ娘に聞いてみる。
「あ、えっと、その、これは……」
『初めまして、マスター！　私は貴方の、貴方だけのデバイスで

す！　名前はレイジングハート。レイハとお呼びください！』

これが僕と、僕の生涯の相棒との出会いだった。

四章

「ロストロギアは、この付近にあるんだね」
夜。
喧騒も遠いビルの屋上に、一人の少女が佇んでいた。
街の明かりに照らされるその装いは異様と言える。
右手に斧らしきものを持ち、長いツインテールと共に靡いているのはマント。そして腰に布を巻いているとはいえ、レオタードのような黒衣。
変態とか言っちゃいけない。
「形態は青い宝石。一般呼称はジュエルシード」
呟く少女の瞳はどこまでも澄んでいて。
それでいてどこか寂しげだった。
「気を付けて、フェイト。ニアSランクの魔導師がすでに動いてるんだ」
少女の足元に寄り添う大きな橙色の狼が心配そうに言葉を発する。
フェイトと呼ばれた少女は微笑み、その頭をそっと撫でた。
喋る狼とコスプレ少女。二人（？）の間には確かな絆が感じられた。
「うん。聞いてる。スクライアの天才児、ユーノ・スクライア。正面からぶつかることは避けないと」
でも、譲れない。
澄んだ瞳の少女は静かに闘志を燃やす。
「母さんのために」
夜の街に狼の遠吠えが響き渡った。

アリサ・バニングスは上機嫌だった。

香りのいい紅茶を口に含み、笑みを浮かべる。
頻繁にやるすずかの家でのお茶会だが、今日はちょっと特別なのだ。
アリサには二人友達がいる。一人はこの家の娘、月村すずか。もう一人は高町礼也。自称普通の子。
二人だけ？　とか言われそうだけど全然寂しくはない。二人は親友だと思ってるし、二人もきっとそう思ってくれてる。たぶん。だといいなぁ……
それはともかく。
自他共に認める仲良しグループなのだけど、いくら仲が良くてもどうしても秘密というものはできてしまうものだ。中でも礼也はいっぱい秘密を隠してる。すずかも同じ考えだったから間違いないはず。
仕方がないとは思うものの、親友を自任するアリサとしてはあまり面白くはないわけで。
今日はその礼也が、自分から秘密を打ち明けてくれると言ってきたのだ。
軽い調子ながらも真剣な目で告げた礼也に、すずかと二人で思わずガッツポーズしてしまった。
すずかもアリサも、女の子みたいな顔してるくせに全然弱いところを見せてくれない彼のことを結構心配してる。こっちはたくさん相談に乗ってもらってるもんだから余計に気になるし。
だからようやく自分たちを頼ってくれたような気がして嬉しかった。
さあ、何でも言ってきなさい！　いじめられてる、とかショタコン疑惑のあるノエルさんになんかされてる、とか実は女の子です、とか何だっていいわよ！　いくらでも助けてあげるし、受け入れてあげるから！
「実はね」
ティーカップをソーサーに戻し、一呼吸おく礼也。関係ないけど

コイツって無駄に作法がしっかりしてるわよね。最初にお茶に招いた時なんて先生より綺麗で、こっちが焦ったくらいだ。
「僕――――」
ゴクリ。自分の唾を飲む音がやけにうるさい。
わくわく。
手に汗を握る。隣を見ればすずかも緊張してるのが分かる。
どきどき。
「魔法使いになったんだ」
思わず殴った私は絶対に悪くないと思う。

五章

僕は今、正座している。
下は芝生だからそんなに辛くないけど、頬と後頭部が痛い。特に後頭部。
「もう、何考えてるのさ君は！」
原因は目の前で仁王立ちしてる金髪っ娘二人。
アリサと、この間恐喝してきた娘。ユーノ・スクライアちゃん。
「魔法は秘密にするように、って。言ったよね？」
この娘、僕がアリサたちにしゃべった途端後ろに転移してきたんだ。そのまま後頭部に痛恨の一撃。
何で殴ったし。絶対拳の痛みじゃない。そもそもなんで聞いてるのさ。
「この付近にジュエルシードの反応があったからサーチしてたんだよ」
律儀に答えてくれるのはいいけど、僕の足をグリグリ踏むのはやめようか。アリサとすずかが引いてる。
「君が誤魔化そうとするからだよ」
言いがかりも甚だしい。真っ当な疑問をぶつけただけじゃないか。
そして何で殴ったかは今分かった。僕の頬ペシペシ叩いてるナイフの柄でしょ。殺す気ですか。
「で？　なんでしゃべったのかな？」
ジュエルシード放っておいていいのかと聞きたいけど、そうしたらナイフの刃がこっち向く気がする。
「……まじめに答えるとね、こういう秘密って複数人で共有した方がやりやすいと思うんだ。もちろん信頼できる相手じゃなきゃ駄目だけどさ。その点二人なら家族並みに信頼してる。それが一つ目の理由」
ペシペシペシ……

とりあえず合格、か？　これがザクッ！　になったらゲームオーバー。なにこれこわい。
「ふ、二つ目はね、こっちのが理由としては大きいんだけど……ジュエルシードみたいな危険物が街中に散らばってるならさ、せめて友達には巻き込まれて欲しくないと思わない？」
内緒にしてたら危険性すら教えられないのだ。それで彼女たちが酷い目にあったら悔やみきれない。
ペシペシ……ピタ。
「はぁ。理由は分かったよ。でもあんまり褒められたことじゃないんだからね？」
言い足りなさそうだけどナイフを仕舞ってくれるユーノちゃん。これで納得してくれるのだからきっと優しい娘なんだろう。アリサ以上にバイオレンスだけど。
そして気持ちを切り替えたのか、先日僕にした説明を二人に繰り返す。
次元世界の概念。時空管理局の存在。ジュエルシードのようなロストロギアの危険性。魔法のあれこれ。そして今海鳴に潜んでいる危機について。
「その、ゴメン。私たちのために言ってくれたのに、殴ったりして……」
説明が終わると、やけにしおらしくアリサが謝ってきた。
素直なのはいいけど、ちょっと落ち込みすぎかな？　らしくない。
「全然気にしてないよ。友情と信頼の証を右ストレートで突き返されたことなんて、全然」
「思いっきり気にしてるじゃないの！！」
「あはは、冗談だよ。涙目になっちゃって。可愛いなあ、もう」
うがーー！　ってなったアリサをすずかが宥める。
うん。いつも通りだ。
……あ。
ホッとしたら大事なこと思い出した。

「ねぇ、ユーノちゃん」
勝手に人のお茶を飲んでるのはまあ許すとして。
「なに？　あとボクのことはユーノでいいからね」
「あ、うん。僕のことも礼也でいいよ。それでさ」
「？」
「ジュエルシード。探さなくていいの？」
「……あ」
目を見開いたユーノの背後で、青い光が立ち昇った。

六章

真っ先に我に帰ったのは、やはり経験豊富なユーノだった。
「封時結界！」
ユーノの足元に翠色の魔方陣が現れ、結界（多分）が周囲に広がっていく。
生き物の気配が一切なくなり、残ったのはユーノと僕。それからアリサとすずかのみ。
「……あれ？　魔力持ち以外は弾かれるんじゃなかったっけ？」
「あんな至近距離で展開して下手に干渉されたほうが厄介だからボクが入れたの！　二人は礼也が守ってよね！」
そう言いつつもこっちに防御結界っぽいのを張ってくれるユーノ。かっこよすぎる。
全員が見つめる先で青い光がようやく落ち着き。
にゃ～お。
「……すずか、すごいね。あんな大きな猫も飼ってるんだ」
「違うよ！？」
うん、知ってる。
響き渡る鳴き声。
メキメキとへし折れる木々。
森の上から覗く、愛らしい、仔猫の顔。
「……たぶん、仔猫の大きくなりたいって願望がジュエルシードに正しく叶えられたんだろうね」
解説するユーノも呆然としてる。
確かにそんだけ大きけりゃ他の猫に餌盗られることもないよね。
月村家のエンゲル係数は跳ね上がるだろうけど。
どしんっ、どしんっ。にゃ～お。
猫の足音なんて初めて聞いたよ。グレイプニルの材料の一つが今ここに！　……どうでもいいな。

「とりあえず、攻撃性はなさそうだからさっさと封印――――」
落ち着いたユーノがその手に魔力を集めた瞬間。
ズドォォォン！！
金色の魔弾が猫にぶち当たった。

「アルフ、足止めを！」
「ああ！」
弾の飛んできた方向に目を遣ると、黒衣の少女に橙色のでっかい犬がこちらへ飛んできていた。
金色の長いツインテールが目立つ少女は猫の方へ。そして犬の方はユーノに突っ込んでくる。
「なめないで」
それをあっさり避け、後ろ足を引っ掴んだユーノ。
そのまま振り回し、
「ちょ！？」
「飛んでけっ」
少女の方へブン投げた。……魔法なしでも強いんだね。
しかしそれだけでは終わらないユーノちゃん。
「アルフ！？」
大型犬より大きいその体を受け止めて体勢を崩した少女。
そこへ、
「Ｌａｓｅｒ　Ｃａｎｎｏｎ！」
翠の奔流が迸った。
「……避けられちゃったかあ。やっぱ砲撃は苦手だなぁ」
魔力の残照が消える。
その先にはマントを大きく削がれながらも健在の少女たちが。犬は気を失ってるっぽいけど。
「くっ、やっぱり桁が違う。母さん！」
少女の叫びに応じたのか。
その眼前に現れる巨大な魔方陣。

初めてユーノに動揺が見られた。
「次元転送！？　こんな大規模……」
が、その表情はすぐに呆れ顔に変わる。
魔方陣から出現したのは五十以上の機械兵。並みの魔導師なら絶望的な状況であろう。少女にも安堵が見える。
けれど。
「Ｐｈｏｔｏｎ　Ｂｕｌｌｅｔ．とりあえず五百」
それは並みの魔導師ならの話。
ユーノの前に無数の光弾が並ぶ。
少女には生憎なことに、ユーノは並みどころか、とびっきりだった。
「Ｆｉｒｅ」
ズドドドドドドドドドドド！！
蹂躙。
まさにその言葉がふさわしい。
その爆音が終わると、機械兵は跡形もなく消え去っていた。
機械兵は。
「ひっ！？」
代わりに、先程打ち出されたはずの光弾がズラリ。
「そんな、フォトンバレットは直射型じゃ……」
「あ、ごめん。それ、ボクが創った誘導弾なんだ。元になった魔法がフォトンバレットだったってだけで。フォトンバレット改、って感じかな」
光弾がパッと散り、少女の周囲を完全に囲む。
なんかノリノリで解説してるけど、そのツインテ少女たぶん聞こえてないぞ。泣いてるし。関係ないアリサとすずかまで涙目だよ。
「さて、とりあえずチェックだよ。大人しく――――」
がつん。

……え？

『全く。魔力反応を捉えて起きてみればマスターはいないし、フェレットもどきはマスターの見せ場を掻っ攫おうとしてるし』

ばた。とユーノが倒れる。同時に、少女を囲んでいた光弾は消失。

凍った空気の中、ユーノの頭があった辺りに浮かぶ赤い宝玉がチカチカ点滅する。

『マスター、聞いてますか？　置いていくなんて酷いですよぉ。慌てて転移してきたんですから』

それは紛れもなく、先日押しかけ相棒（？）となったデバイスで。

「な、な、なにやってんのレイハあああ！？」

僕は間違いなく今生最大の悲鳴をあげた。

七章

陽光が気持ちよかったのか、いつの間にか寝てる仔猫（大）。
気絶してる犬とユーノ。
涙目でぽかんとしてる幼女三人。
ビュンビュンと目の前を飛び回っている赤い何か。
……どうしてくれるんだこの空気。
とりあえず赤いのは無視して一番重症っぽい謎の女の子の方へ。
腰が抜けたのか、空も飛ばずにへたり込んでるし。
「えと、大丈夫？」
「いや……！」
思いっきり怯えられた。うさぎみたいに赤い目がすごいウルウルしてる。人形めいた可愛らしい顔も相俟って、罪悪感が半端ない。こっちも泣きそうだよ。
『マスター、早くその娘ヤっちゃいましょう！　今ならただのサンドバックです！』
「あの怖いお姉ちゃんは寝ちゃったから。ね？　もう大丈夫だよ」
近づいたら泣かれそうなので、少し離れたところに腰を下ろして再チャレンジ。
ついでに物騒なこと言ってるのは握りつぶす。
手の中から恍惚とした声が出てるけど聞こえない。聞こえないったら聞こえない。
「……いじめない？」
「うん。いじめたりなんかしないよ。ほら、あのお姉ちゃんたちのとこ、行こ？　あのお姉ちゃんたちは優しいから」
「……うん」
よかった。なんか幼稚園児をあやしてる気分。どうも微妙に幼児退行してるっぽい。
それはいいんだけど、頷いてはくれたものの動かない。

もじもじ。もじもじ。
「？　どうかした？」
「その……あしが、うごかないの」
ああ。本気で腰が抜けてるのか。気持ちは分かる。ユーノちゃん、すごい嗤ってたもんねえ。あの娘絶対ドSだよ。優しいとか思ってた数分前の僕を殴ってやりたい。
警戒はだいぶ解けてるみたいなので、近くに寄って背中をさすってあげる。
吐いてる人とかによくする行為だけど、子供にやると結構安心させる効果もあったりするのだ。たぶんだけど。
「おぶっていくから、しっかり掴まって」
ちょっと落ち着いたところで女の子のまえにしゃがみこむ。
「……ん」
なんかすっごく素直。
しっかりとしがみついてくれたところで、そっと立ち上がる。
……軽いな、おい。ご飯食べてるのか？
気になったけど今は後回し。
椅子のところまでゆっくり運んで座らせる。
「アリサ、すずか。この子のことお願い。そばにいてあげて」
僕も付いててあげたいけど、あんまりノンビリもしていられない。だって結界消えてるんだもん。あんなデカイ猫が見つかったら大騒ぎだ。
あれで意外と面倒見のいいアリサと、よく気の回るすずかなら大丈夫だろうし。
くいっ。
猫の方へ行こうとしたら服の裾を引っ張られた。
「どうしたの？」
うるうる。
「どっか、いくの？」
……何この子かわいい。

「あのねこさんをこっちに連れてくるんだよ。あんなところで寝たら風邪引いちゃうからね。そうだ！　連れてきたらねこさん抱っこしてみる？」
「……うん！」
ヤバイ。なんか目覚めそう。
ぱあっ、と笑顔になった女の子に戦慄しつつも猫の真下に。
「レイハ、できる？」
握り締めたままだった手を開いて確認する。
『ああっ、マスターの温もりが全身に……ごほん。もちろんです、マスター』
「……じゃあ、お願いね」
とっさに放り投げたくなったけど今は我慢。
汚物を摘まむようにして猫にくっつける。
「……なんかすごいあっけないね」
魔力光すら漏らさず、あっという間に仔猫は小さくなった。
そのそばに青い宝石、ジュエルシードが浮いている。
『封印、っと。状態がひどく安定していましたからね。暴走状態だとこうはいきませんから、舐めちゃいけませんよ？』
ジュエルシードを吸い込みながら忠告するレイハ。
基本的にぶっとんでる子だけど、だいたいは僕のことを想ってくれてるからいまいち怒る気にもなれないんだよねえ。それが僕のためになるかはともかく。
「わあ、ねこさんだぁ！」
まあ、今はレイハのことはいい。
とりあえずこの子が可愛すぎる。
眠ったままの仔猫を抱いて戻った僕を迎える笑顔。この笑顔のためなら死ねる。かもしれない。
「その子、フェイトっていうんだって」
仔猫を抱きしめてはしゃいでる女の子を見てると、アリサが隣に来て教えてくれた。

ちゃんと仲良くしていてくれたらしい。
すずかの方はそのフェイトちゃんと一緒に仔猫を撫でている。
その様子を見るに、もうすっかり打ち解けているようだ。
よきかなよきかな、っと。
二人してにやにやしていると。
『ああ、フェイトがあんなに笑顔で……ありがとうございます』
『うんうん。私からも姉としてお礼を言うわ』
なんか出た。
「……今度は何？」
いい加減疲れてきたんだけど。格好からして面倒臭そうそうだし。
片方は黒のタイツにボディスーツをくっ付けたような服。正直下着にしか見えん。一応白いジャケットを羽織ってるけど、サイズがぴっちりの上に一つしかボタン留めてないからほとんど隠せてない。ナースキャップじみた帽子がまた異様さを際立たせる。
薄茶色の髪をした優しそうな美人さんなんだけど、それだけになんかすごい残念。似合ってはいるんだけどさ。
でもこっちはまだマシなんだ。
問題はもう片方。
フェイトをそのまま幼くしたような幼女。
君はなんで素っ裸なんだよ！？
『へっ？　私たちが見えるのですか？』
見えちゃなんかまずいのか。いや、幼女の方は確かに見られちゃまずいか。
いまさら恥ずかしくなったのか手で隠してるけど、もう遅いって。
その様子に苦笑しながら美人さんは少し考えるような仕草を見せ、
『うーん、まずいというかですね……私たち、幽霊なんですよ』
にっこり笑って言ってくれた。
……はい？

八章

ドタバタしたした一日も終わり、ようやく夜になった。
床に敷いた布団にぐてー、っと寝そべる。
普段はベッドを使ってるけど、今日はお客さんが使用中。
シンプルな白いベッドを使っているのは、遊びつかれて寝ちゃったフェイトちゃん。
もし暴れだしたら危ない、ってことで犬と一緒に連れて帰ったのだ。
アリサもすずかも引き取りたがってたけど、強引に押し切った。だって可愛いんだもん。
ちなみに犬の方はアリサに借りた猛獣用の檻に入れて庭に置いてる。
逆に誰も引き取りたがらなかったユーノちゃん。
二人ともめちゃくちゃ怖がってたので、仕方なく彼女もウチで引き取った。
フェイトちゃんのトラウマになってそうなので部屋は別だ。今はお姉ちゃんの部屋にいるはず。
……しかし、犬もユーノちゃんも結局起きなかったな。犬は分からないけど、ユーノちゃんが起きたら絶対に病院に連れて行こう。
レイハが言うにはどっちも大丈夫らしいものの、さすがに心配だ。
「はふぅ……二人のおかげでだいたい事情はわかったけど。僕じゃあどうしようもないよねえ」
思い起こすのは幽霊の二人、リニスさんとアリシアちゃんに聞いたフェイトちゃんの事情。それは二十六年前の事故から始まる。
意に沿わぬ実験による事故が招いたアリシアちゃんの死。
その事件がアリシアちゃんのお母さん、プレシア・テスタロッサを狂わせた。
優秀な科学者だったプレシアさんはアリシアちゃんの死体を保存

し、記憶転写型クローンの研究に取り掛かる。
体を壊してまで長い年月を研究に費やし、ついにはその技術を完成。
けれど、そうして生まれたクローンは、アリシアちゃんの記憶を持ちながらも全く別の存在だった。これがフェイトちゃん。
プレシアさんが壊れたのはこの時。
現代の技術では蘇生が不可能だと悟り、過去の遺失技術に頼った彼女はフェイトちゃんを魔導師として鍛え上げる。
望みのロストロギアが見つかったときに、病に冒された自分の代わりとなる駒として。
その養育係として生まれたのがリニスさんだ。使い魔、という存在らしく、アリシアと一緒に死んだペットの山猫が素体になったそうだ。
プレシアさんのフェイトちゃんへの扱いは酷いものだったらしい。
リニスさんは心を痛めつつもフェイトちゃんの教育を終え、契約通り消滅することになった。
そのとき見たのが、半ば悪霊になろうとしていたアリシアちゃんの姿。
当然の結果と言えるかもしれない。
プレシアさんの未練によって成仏することもできず、自分のためにやつれていく母の姿を見続ける日々。
それが終わったかと思えば、ようやくできた妹のような存在を虐待する、優しかったはずの母。
その光景をただ見ているだけしかできなかった。
心の均衡を崩すには十分すぎる。
慌てたリニスさんは気合（！）で現世に留まり、アリシアちゃんの面倒を見ることにしたんだとか。
猫には九つの魂があるっていうけど、もしかしたら本当なのかもしれない。
それからは結構楽しかったらしい。

プレシアさんの枕元に立って、説教と泣き落としで虐待をやめさせたり。
次第に子供らしさを取り戻していくフェイトちゃんを愛でたり。
たまに街に出る二人に付いていってはウィンドウショッピングしたりタダで映画を見たり。
とにかく遊びまわったそうな。
けれど、虐待こそなくなったものの、プレシアさんはアリシアちゃんのことを諦められなかった。
結局、プレシアさんはロストロギアを求めることに。古の都、アルハザードへの道を開くため。それがどんなに不可能に近かったとしても。
今回のジュエルシード探索はそうして始まったらしい。
始まった途端に終わったけど。

なんとかしてあげたい。切にそう思った。
たぶんだけど、アリシアちゃんとリニスさんはもう自然には成仏できないんじゃないだろうか？
彼女たちの顔を見てるとそんな考えが浮かんできてしまう。
長く現世に留まりすぎたせいか、その行動のせいか、はたまたなんらかの魔法的要因によるものか。
おそらく彼女らの魂は変質してしまっている。幽霊なんて見たことのない僕が知覚できるのがその証拠。
オカルトなんて完全に専門外。だから僕の推測は的外れなのかもしれない。
でも、もしこれが正しかったら。
死ねばそれで終わり？　それがこの世の真理？
そんな理なんてクソくらえだ。
その例外を僕自身が体験している。
一度死んだ僕が、こうしてここにいる。
だから、諦められない。そういうものだ、なんて割り切れない。

安っぽい同情や、くだらない偽善かも知れない。
別にそれでもいい。
とにかく彼女たちを救いたい。
だけど……それなのにっ！
この世界よりずっと進んだ技術がある世界に生きた僕の知識が。
経験が。
死者蘇生なんて不可能だと声高に告げてくる。
僕のはあくまでもイレギュラー。参考にすらならない。プロセスがわからないし、そもそも幽霊になったこともないのだから。
「こんなに自分の無力を呪ったのは久しぶりだよ……っ！」
フェイトちゃんの寝顔を眺める二人は幸せそうで。それが余計に悲しい。この二人はきっと諦めきってる。死を受け入れてる。じゃなきゃ、こんな綺麗な顔するもんか。
僕の感情を察したのか、アリシアちゃんがくすっ、と笑う。
『基本的にさ。生き物の体って、触ろうとすると弾かれるんだよねー。例外は自分の体』
でも。
言い聞かせるように。腹が立つくらい透き通った笑顔で。
『弾かれはしない。けどそれだけ。何度やっても素通り。ああ、これが死んだってことなんだなー、って妙に納得しちゃった』
もう死んでるんだよ、と。だから気にしないで、と。
悲しみの欠片すら見せず、達観したように話すアリシアちゃんがなんだか遠く見えて。
僕は少し泣いた。

『ふむ……マスター』
珍しく黙り込んでいたレイハが口を開いたのはその時だった。
二人を知覚できない彼女のために念話で話を伝えてからは一言も喋っていなかったのだけど。
『二人を救いたいですか？』

いつもと違う真面目な口調に迷わず頷く。
「……レイハ、なにか方法があるの？」
その言い方だと、まるで……
わずかに期待を抱いて尋ねると。
『もちろんです』
返ってきたのは自信に満ち溢れた声。
『私はマスターのデバイスですよ？　マスターの願いに応えることが私の役目です』

八章（後書き）

この辺はリニスを出したくて出来た、ちょっぴり暗めのお話。無理矢理なとこが目立つけど適当に流してください（汗）

九章

用意するもの。リニスさんとアリシアちゃんの服。以上。
「……これだけでいいの？」
自信満々なレイハの指示に従ってお姉ちゃんとお母さんの服を借りてきたけど。
もっと蝋燭とかお香とか使うのかと思ってた。
『はい。いいんです。必要なものは私が持ってますから』
そう言ったレイハから出てくるのは十二個のジュエルシード。ユーノ、集めた分入れっぱなしだったんだな。
って、違う。
「それで何する気！？」
ユーノ曰く、確かにジュエルシードは願いを叶える宝石だけど、大抵の場合は歪んで叶えてしまう代物。おまけに扱いが難しく、一個のジュエルシードですら危険な次元震を引き起こしかねないんだとか。
それが十二個。暴走した時の脅威は計り知れない。
けれどレイハは何でもないことのように、
『問題ありません。私が制御しますので』
軽く言ってのける。
『私が未来から来たことはお話しましたね』
「うん。っていうかそれしか聞けてないけど」
未来から僕に会うためにタイムスリップしてきた、って言われたときは思いっきり引いたよ。
あ、リニスさんたちめっちゃ驚いてる。まあ、驚くよね。時間遡行は不可能だって証明までされてるって話だし。
『それでですね。私が来た未来では、ジュエルシードの制御方法が確立してたんです』
……この子、下手なロストロギアよりすごいんじゃなかろうか。

管理局に目を付けられないように頑張ろう。ユーノの言うことが本当なら、管理局ってあちこちでロストロギアを強引に接収してるらしいもん。せっかく発掘したロストロギアをいくつも持ってかれた、って嘆いてた。

『もっとも、暴走した時ほどの効果は望めませんが。それでも一人当たり六つも使えば、人形に魂を宿らせるぐらい容易いです。だぶん。まあ、マスターの想像力次第でしょうね』

たぶんなのか。まあ、レイハも霊魂なんて扱うのは初めてだろうし、仕方ないか。

……ん？

「人形って言ったけど、そんなものないよ？」

『今から造るんです。まずはマスター、アリシアちゃんの姿のイメージを私に送ってください』

レイハが輝いて見えるよ。

どうやるのかは分からないけど、言われたとおりにやってみる。

開き直ってるのか、ノリノリで全裸のまま色んなポーズを決めてるからそれをレイハに中継。

僕の目を通した映像でならレイハにも二人が見えるんだよね。声は聞こえないから僕が通訳（？）してるけど。

おいコラ股を開くな。五歳児のを見たって嬉しくない。

しばらくそうしていると。

『はい、オーケーです。それじゃあマスター、ちょっと魔力を貰いますよ』

「へっ？……ひゃうっ！？」

唐突な合図に心構えもできず、思わず変な声が出た。うぅ……なんでこんな気持ちいいのさ。

時間にして十秒ほどか。

魔力を吸われる感覚がなくなり、閉じていた目を開く。

「……おお」

目の前にあったのはアリシアちゃんと寸分違わぬ体。これ、人形

というより複製だろ。
魔力でできているからか、アリシアちゃんが恐る恐る触れてみても弾かれない。
『おお、自分の体の時とは違うなんか変な感触』
つんつん。つんつん。……にやり。
面白がって自分の人形を突いていたアリシアちゃんが親父ギャグを思いついた中年みたいな笑みを浮かべた。
人形にぴったり重なるように寝そべると。
「幽体離脱〜！」
……え。
「？　……ありゃ？」
不思議そうに自分の体を見下ろすアリシアちゃんの、人形。
『……魂舐めてましたね。完全に定着してるみたいです』
なんかあっさりアリシアちゃんが蘇った。……何この微妙な気持ち。

『んんっ、気を取り直していきましょうか。結果的には最高のものですし』
そうだよね。ジュエルシードなんて使わなくていいならその方がいいもん。レイハ冷静。
『では、次はリニスですね』
『はい。よろしくお願いします』
嬉し涙を拭い、頭を下げるリニスさん。本当に嬉しそうな笑顔を見ると、いかにアリシアちゃんのこと心配してたかが分かる。
この優しい使い魔さんのためにも、もうひと踏ん張りだ。
レイハ、頼んだよ。
『任せてください。ではリニス。脱いで』
……今なんて言った。
『ぬ、脱ぐんですか？』
『はい。じゃないと正確な人形が造れませんし』

いや、造れるだろ！？　こんだけぴっちりした服着てるんだからさ。
『なにを躊躇うんです？　リニスは完全な体が手に入る。マスターは夜のオカズが手に入る。いいことずくめじゃないですか』
無視か。そして何が夜のオカズだ。勝手に人を変態にするんじゃない。そもそも精通すらまだだよ。
二人からも何か……って、どうした二人とも。
『男の子、だったんですか？』
「何を言う。どっからどう見ても男の子……に見えないんだった。忘れてたよチクショウ」
女の子と思われたんだね。アリシアちゃん顔真っ赤。
でも安心して。君のセクシーポーズはオカズにしないから。というかなれない。だから叫ぶのはやめよ？　君もう幽霊じゃないから。声聞こえちゃうから。
レイハは焦る僕を追い詰めるように、
『さあ、早く脱ぎなさい。まな板にしますよ』
『脱ぎます！　すぐ脱ぎます！』
ちょ！？

～都合によりカット～

『どうですか、二人とも？　違和感はありませんか？』
いろいろ大変だったけどリニスさんも無事人形に納まった。
何が大変って、二人とも全然恥らわないんだよ。
最初はいきなりだったから過剰反応したみたいだけど、リニスさんは大人だし、アリシアちゃんに至っては精神的にはもう三十歳である。九歳児相手に恥ずかしがる理由もない。
……僕も前世あわせたら四十近いけど。言ったら叫ばれかねないから当分は秘密。
「完璧だよー？　服も私好みだし」

お姉ちゃんの古着を着たアリシアちゃん。女の子らしいピンクのワンピースだ。ちょっと大きめだけどよく似合ってる。今じゃもっぱらパンツルックだけど、こんな服着てた時代もあったんだねえ。

「リンカーコアもあるようですね……どういう理屈かわかりませんけど、すごいですね」

リニスさんのはお母さんの服。落ち着いた色のシャツに白いカーディガン。下は桜色のロングスカート。どうしても猫耳を隠したいらしく、季節外れのニット帽を被っている。……可愛いと思うんだけどな。

ちなみにリンカーコアっていうのは魔力を作るための目に見えない器官らしい。そんなのどうやって再現したよ。

『問題ないようですね。それではお二人の体について説明します』

レイハの説明によると。

参考にしたのは『夜天の魔導書』というロストロギアにあった守護騎士プログラムというやつらしい。……真面目にレイハがロストロギアに指定されそう。

魔法生命体というものになっているそうで、レイハの改良によって三大欲求まで備えているとのこと。要するに体が特殊な魔力で出来ていること以外ほとんど人間と変わらない。

ただ、存在のための魔力を供給しているのは主として設定された僕であり、怪我をしても僕がいれば再生できる反面、僕が死ねば小さな傷すら治らなくなる。二人は全然構わないと言ってくれたが、これでそうそう死ねなくなった。

ちなみに主といっても命令権があるわけではない。念のため。

さらに人間と違う点として、年を取ることがないらしい。

「……え、もしかして私ってずっとこのまま？」

愕然としたように呟くアリシアちゃん五歳。

『エターナルロリータ……ぷっ』

レイハあああああ！？　前から思ってたけど、絶対性格悪いよね！？

『心配しないでください。アレンジを加えてますから、肉体年齢

は操作できます』
ほっ、よかったぁ。アリシアちゃんも胸を撫で下ろして、
「……って、何やってんの！？　その服で大きくなったら下見えちゃってるから！　穿いてないから丸見えだよ！」
いきなり大きくなった。十二歳くらいだろうか。年の割りに無駄に発育がいい。ちょっと引っ張ったら破れそうなくらいパンパン。
……穿いてないのは僕の趣味じゃないからね？　五歳の頃の下着なんて残ってなかったってだけで。
「ん～？　興奮しちゃった～？」
「うっさい三十路」
「照れない照れない」
やばい。殴りたい。否定しきれないだけにむかつく。
精神衛生のためにアリシアちゃんは無視してリニスさんに向き直る。
……なんで自分の胸揉んでるのさ。心配しなくてもまだリニスさんの方が大きいよ。まだ。
「えーと、リニスさん。プレシアさんのところへ行くんですよね？」
二人はプレシアさんを止めたがっていたはずだ。
案の定どちらも真面目な顔になって頷く。ついでにアリシアちゃんは五歳の体に戻る。あーあ、服伸びちゃってるよ。お姉ちゃんになんて言おう？
『では今から行きましょうか。朝までに戻ればいい訳ですし、プレシアが寝ていたら叩き起こしましょう』
「そうですね。それでは、次元転移。次元座標７８７６Ｃ　４４１９　３３１２……」
なんか長いコードを読み上げるリニスさん。
鶯色の魔方陣が広がる。僕はその光を避け……って、
「アリシアちゃん、離してくれないかな？　ここにいたら転移に巻き込まれそうなんだけど」

なんだその変なものを見る目は。僕はお姉ちゃんへの言い訳を考えないといけないんだ。
「あのね。当事者なんだから君も行くに決まってるでしょーが」
えー。やったのほとんどレイハじゃん。僕は君らの主になっただけで。
「……待て。マジで離して。娘さんの主人になりました、とか言ったらぶっ飛ばされるじゃないか」
性質上殺されはしないと思うけど、生かさず殺さずで監禁とかされそうなんだが。アリシアちゃんに対する執念とか聞いてたら普通にやりそう。
「だーめ。ちゃんと説明してあげるから、ね？」
それが一番怖いんだって。その顔は絶対変なこと言う気だよね。体の隅々まで視姦されたー、とか。
「事実じゃん。男らしく諦めなよ」
「……レイハ、もしものときは頼んだ」
『まかせてください。我に秘策あり、です』
鶯色の光が一層強く輝く。
「……開け、いざないの扉。時の庭園、テスタロッサの主のもとへ！」
どうか無事に帰れますように。

十章

「ここが時の庭園。プレシアの家になりますね」
ピシャッ！　ゴロゴロ、ピシャーン！
「……帰る。レイハ、次元転移」
リニスさんとアリシアちゃんに押さえ込まれた。
「離して！　ここ絶対家じゃないって！　魔王いるって！」
命の危険しか感じない。なんだよこのおどろおどろしい雰囲気。
「落ち着いてください！　プレシアも難しい年頃なんです。もとは綺麗な庭園だったんですよ？」
綺麗な庭園がどうやったらこうなるのさ。っていうかプレシアさんもう五十歳じゃん。あ、更年期か。
「……そっか。大変なんだね」
更年期障害って辛いらしいからねえ。二人の話からして治療なんてしてないだろうし。
「なんかいきなり大人しくなったねー。ま、いいや。早いとこ行きましょ」
大豆がいいんだっけ。納豆とかは食べそうにないしなあ。豆乳とか今度持ってきてあげようかな。

「誰！？」
いや、貴女が誰？　考え事してたらいつのまにか玉座の間っぽいとこにいたんだけど。
玉座（？）に座ってこっちを見下ろしてる妙齢の女性。
長い黒髪に紫の妙に露出の激しい服。
いかにも悪女っぽいんだが。紫の口紅とか初めて見たぞ。
「久し振りですね、プレシア」
……この方がプレシアさんですか。若いなオイ。
けどアリシアちゃんとフェイトちゃんの露出癖の元凶が分かった。

五十でその服はやばいって。思ったより深刻な病状っぽい。
「アナタは……リニス！？」
「はい。あなたのせいで、戻ってきちゃいました」
険しい目で睨むプレシアさん。警戒を解くには至らなかったらしい。
けれど。
「私もいるよー」
僕の陰に隠れていたアリシアちゃんが顔を出すと。
「……え」
目は限界まで見開かれ、口は言葉を忘れた。
ふらりと。弱弱しく立ち上がり、まるで怯えるように一歩ずつ近づいてくる。
「あり、しあ……？」
「うん。久し振り、ママ」
震える瞳から、一筋の涙が零れた。

わんわん泣くプレシアさんを宥め、これまでの経緯を説明するのにおよそ一時間を要した。
さらにフェイトちゃんに優しくしなかったから、とかいって何十分かお説教。リニスさん意外とずかずか物言うのね。
お説教はまたプレシアさんが泣いて終了。なんでもフェイトちゃんに構ってアリシアちゃんのことを忘れるのが怖かったんだとか。アリシアちゃんに呆れられ、リニスさんには怒られてまた泣いた。
「礼を言うわ。タカマチ・レイヤ……君？　本当に、ありがとう」
化粧崩れまくりの酷い顔。それでも表情は晴れやか。
やったのはほとんどレイハだけど、この笑顔を見るとほんの少しでも手助けできたことを嬉しく思う。
「そういえば、私もお礼を言ってませんでしたね。ありがとうございます」
嬉しく思うんだけど。

僕自身はほとんどなにもやってないから、こんなに感謝されると心苦しいというか。
アリシアちゃん、この空気どうにかして。
僕のアイコンタクトが通じたのか。アリシアちゃんがにやっと笑って口を開く。
「うんうん。ありがとね、ご主人サマ♪」
……。
「アリシアちゃんに頼んだ僕が馬鹿だったよ！」
「マチナサイ、レイヤ」
扉開かないし！
「どういうコトカシラ？」
ひっ！？　なんかプレシアさんの右手がバチバチ鳴ってる！？
誤解とか言って通用する雰囲気じゃないよ！
「レ、レイハ！　秘策っていうのお願い！」
なんか出発前にかっこよく言ってたよね！　それに賭ける！
『お任せを。プレシアこれを見なさい』
レイハの言葉とともに空中に映し出される映像。
全裸のアリシアちゃんが色んなポーズを取って……
『次元世界中にこの映像をばら撒かれたくなかったら大人しくしなさい』
バチバチッ！
「レイハのばかあああ！　バリアジャケット展開！」
ズガーーーン！
僕が光に包まれるのと、紫電が辺りを埋め尽くすのはほぼ同時だった。
「あ、あっぶな～……レイハのせいで危うく死ぬとこだったじゃないか。それからその映像ばら撒くのは無しだからね？」
『すみません。ドラマでこうやって脅迫して女の人を言いなりにするシーンを見たことがあったのですが……』

「何のドラマだよ……すぐに忘れなさい」
煙が晴れる。
周囲はぼろぼろだけど、バリアジャケットの展開が間に合ったおかげで死なずにすんだ。
けどまだ油断ならない。またバチバチ鳴ってるから第二撃がくるかも。
「ふん、少しはやるよう……」
？　どうした、プレシアさん？
剣呑な音を放っていた雷球が小さくなっていく。
「……礼也クン、人のこと言えないじゃん」
いや、何が。
「その格好ですよ！　どう見たって私の格好の方がマシだったじゃないですか！」
なんでさ。レイハと一緒に考えた力作だぞ。
モチーフはレイハの強硬な主張でズバリ『天使』。最初にイメージしたのはギリシア神話のヘルメスで、踝のところに羽の付いたサンダルや、帽子はないけど耳の上辺りに生えてる一対の翼がその名残り。
それからヘルメスは天の使いではあっても天使じゃないって話になり、背中に大きな翼を一対生やして完成。翼は全部純白で統一してみた。
ちなみに、せっかくだから杖もヘルメスのに似せようかと思ったけど、取り回しに困るので断念した。だから杖は胸丈のシンプルな直杖だ。中央部分にレイハの赤いコアが輝いている。
どうだ。どう見ても天使だろう。三対も翼があるんだぞ。
「知りませんよ、変態。ただの素っ裸の露出狂じゃないですか」
「？　天使が裸なのは当たり前じゃないか」
一斉に白い目で見られた。
「むう、これで文句ない？」

なぜか空気がしらけ、とりあえず命の危機は去った。
アリシアちゃんもプレシアさんの誤解を解いてくれて、万々歳。
それはいいんだけど、どういう流れでか僕のバリアジャケットを変更させられることになった。
……なぜだ。
納得いかなかったけどあのプレシアさんには逆らえる気がしない。あれは完全に子供を叱る親の目だ。
そんなわけで全然天使っぽくない格好をさせようとする三人に全力で抵抗しつつ決まったのがこのバリアジャケット。
翼はそのままに、紐で留めることによって背中を大きく開けた膝丈の白いチュニックを追加したものになる。
背中が開いてるから翼の邪魔にもならないし、これはこれでいいかもしれない。
何より天使っぽいし。
「全く。レイハ？　アナタが止めなきゃダメじゃない」
『すみません、プレシア。あまりに楽しそうだったもので……』
プレシアさんとレイハがなんか喋ってるけど関係なさそうなので放置。
そろそろ帰って寝ないと明日に響く。
……そういや、何で天使にこだわってたんだっけ。ま、いいか。
なんか理由があったんだろう。
『基本的に思い込みが激しいんですよねぇ』
「……そうみたいね」
ふわぁ、ねむ。

十一章

「……ってなことが昨日あったんだ」
「長いわよ。もう昼休み終わっちゃうじゃない」
僕がどんなに大変だったとしても今日は月曜日。学校に行かなければならない。
普段も学校はそう好きではないけど、妙に睨んでくるアリサとすずかの視線のせいでめちゃくちゃ居心地が悪かった。
内容が内容だけに昼休みまでは待ってくれたが、四時限目が終わった途端捕まって屋上へ。
フェイトちゃんが気になって電話を掛けたのに繋がらないから心配したらしい。
そういや着信音がしてた気がしなくもない。
さすがに悪いと思ったので、レイハの記録映像をこっそり見せながら昨日のことを説明した。詳しい事情はちょこっとぼかしつつ。もちろん裸映像はとかは見せてない。アリシアちゃんのは既に削除済みだしね。アリシアちゃんのは。
「それで、結局フェイトはどうしたのよ？」
「幼児退行が戻ったみたいで、恥ずかしがってベッドに篭城したからリニスさんに任せてきた」
昨日の記憶がバッチリ残ってたらしく、真っ赤な顔でうーうー唸っててすごく可愛かった。
そこへリニスさんが顔出すもんだから、夢だと思ったのか今度はリニスさんを引きずり込んで離さなくなり。
リニスさんも満更じゃなさそうだったから放置してきたけど、下手したら今でも抱きつかれたままかもしれない。
ちなみにリニスさんは、フェイトちゃんのことが落ち着いたら僕の使い魔になるつもりらしい。恩を返したいんだとか。もっと軽いノリでいいのに。おかげで家族への説明が大変だった。赤飯炊かれ

そうになったし。
そしてアリシアちゃんの方はプレシアさんのところ。大人フォームになってミッドというところの病院に連れて行ってる。もし生き返れたら真っ先にやりたかったこと、だそうだ。プレシアさん、どんだけ無理してたんだか。
「ふーん、じゃあ今日はアンタの家に行くわね。あのおっきな犬も気になるし」
「あ、あの犬ならやたら吠えて暴れるから、お兄ちゃんが知り合いの獣医さんのとこに引きずってったよ」
すごいよね、お兄ちゃん。大型犬が全力で抵抗してるのに普通に歩いてくんだもん。
二人とも引いてるけど、これぐらい慣れてもらわないと。特にすずかなんか将来のお義兄さんになるんだよ？
「そ、そうだ。ユーノちゃんは大丈夫だったの？」
場の空気を変えようとすずかが口を開く。
けどユーノちゃんの名前出しただけでアリサがビクッっとなった。まだ怖いんだね。
でも安心してアリサ。
「ユーノちゃんはね、今朝目を覚ましたみたいだけど、暴れようとしたからお姉ちゃんがまた気絶させたんだって」
ウチはもっと強い人ばっかりだから。お母さん以外は、飛ばれたらともかく室内戦闘じゃたぶん負けない。
「そ、そうなんだ……」
そうなの。
微妙な空気のまま予鈴が鳴り、とりあえず放課後はウチで遊ぼう、ということになった。

最初に気付いたのは一番目がいいすずかだった。

「あれ、何だろう？」
帰り道。
人気の多い大通りで、一際人が集まっている場所があった。
人だかりの中心にはカップルらしき大学生っぽい男女と、小学校高学年くらいの女の子。
よく見たら男の人は頬に紅葉が出来てるわ、あちこちに痣があるわ酷い状態である。
……二股がばれたとか？　片方幼女だぞ。
よく分からなかったので見ていたお婆さんに聞いてみた。
お婆さんが言うには、最初はただのカップルの痴話喧嘩だったらしい。
けれど頬を叩かれた男の人が女の人に掴み掛かったところを見た女の子は、なぜか女の人が暴漢に襲われてる、と勘違いしたらしい。
勇んで飛び込んでいき、あっという間に男の人をボコボコにしたそうだ。
なんともまあ……
「アリサみたいな娘だな」
「私はそこまでぶっ飛んでないわよ！」
一年の頃いきなり襲い掛かってきた奴が何を言う。
落し物して泣いてたすずかに話を聞いてたところへまさかのとび蹴り。
完璧油断してたからめちゃくちゃ痛かったんだぞ。
「うぅ、その頃ちょうど特撮ヒーローにはまってたのよ」
それにすずかが怒って大喧嘩になり。
慌てて割って入ったけど、すずかを抑えるのがもう大変。すごい力強いんだもん。固め技使わされるとは思わなかった。
それから三人ですずかの落し物を探し、ちょっと仲良くなって。
典型的な悪ガキだったアリサをすずかと一緒に矯正してたら、いつの間にか三人でいるのが当たり前になってた。
「懐かしいなぁ」

「そうだねぇ」
「しみじみと思い返すなあ！　今考えるとすっごく恥ずかしいんだから！」
いい思い出なんだけど、アリサの中では黒歴史になってるっぽい。
アリサの赤い顔を堪能したところで女の子に注意を戻す。
どうも女の人が誤解を解いたらしい。あたふたしてるのがちょっと面白い。
あ、逃げた。足速いな。
残されたカップルは女の人が男の人を介抱してる。過程はともかく、あの女の子のおかげでよりを戻したようだ。
年齢的に暴行罪にはならないだろうし、通報する気もなさそう。
一件落着なのかな。
そう思っていると。
（『マスター』）
レイハから念話が入った。
（『あの黒髪の少女が向かった方向で魔法の発動を確認しました。魔導師かもしれません』）
なんと。悪人ではなさそうだけど、一応警戒しておくか。

「ただいまー」
「「お邪魔します」」
高町家。
家族は出払ってるけどリニスさんたちはちゃんといるみたい。居間から人の気配がする。
ガチャ。
「あら、おかえりなさい礼也」
バタン。
「？　どうしたのよ？」

なんでもないよ、アリサ。ちょっとびっくりしただけ。
気を取り直してドアを開ける。
「ただいま、リニスさん。フェイトちゃんも」
「お、おかえりなさい、礼也」
居間のソファには談笑しているリニスさんとフェイトちゃん。
それはいいんだけど。
「……そこで磔になってるのは何？」
一般的な居間の風景の中で異彩を放っている塊。
人型なのは分かるけど、リニスさんのバインドでガチガチに巻いてあって全然見えない。
強盗とか？　にしてはやけにちっちゃいんだけど。
「ああ、これですか？　あのスクライアの少女ですよ。フェイトを怖がらせたので」
……えー。
「結構優秀な魔導師みたいですよ。すごい速度でバインドブレイクしようとしてます。無駄ですが」
リニスさん強いんだね。
「籠めてる魔力量が多いだけです。どうやったのか知りませんが、プレシアの使い魔だった頃と同じように魔法が使える上に、供給される魔力がかなり多いですから」
つまり膨大な魔力を持った熟練の魔導師、と。やっぱ強いんじゃんか。
それにしてもユーノちゃん気絶してばっかりだ。あとで謝っとこう。
「え、えっと、初めまして。アリサ・バニングスです。礼也さんの友人をやらせていただいてます」
「は、初めまして。同じく礼也さんの友人をやらせていただいている月村すずかと申します」
硬直の解けた二人が慌てて挨拶する。こういうときの二人は馬鹿丁寧だ。まだ言葉遣いは微妙だけど、さすがお嬢さまって感じ。

「あらあら、礼儀正しい子たちですね。もっと砕けた感じでいいんですよ？　礼也から聞いてるようですが、使い魔のリニスといいます。これからよろしくお願いしますね」
見惚れるような笑顔で返すリニスさん。その背後で磔の人型が蠢いているせいで台無しだが。結構不気味な光景である。
「フェイトちゃんは昨日振りだね。こんにちは」
けれどすずかは意外にハートが強い。こちらこそよろしくお願いします、などと言いつつフェイトちゃんに話しかけた。
「うん。こんにちは、すずか」
はにかみながらも小さく手を振るフェイトちゃん。可愛い。同じ顔なのにやたら擦れてるアリシアちゃんを見たせいか、余計輝いて見える。
「アリサも。こんにちは」
「こ、こんにちは！　んっん、さて！　今日は何する？」
アリサは若干声が震えてたけど、持ち前の負けん気で持ち直したのかいつもの調子に戻った。
これなら大丈夫、か。今朝の錯乱っぷりを見ただけに、ちょっと心配だったけど。仲良くやれそうだ。
「だいぶ落ち着いてるね。リニスさんがなんか言ったの？」
アリサが持ってきていたトランプの遊び方を興味津々で聞いている様子を見ながら尋ねる。すごく楽しそうなのだが、それだけに不自然。フェイトちゃんはプレシアさんのために必死でジュエルシードを探そうとしていたはずなのに。
「全部話しました。プレシアのことも、アリシアのことも。プレシアの病状が安定したら会いに行くそうです」
「それは、また……」
大丈夫なんだろうか？
アリシアちゃんの記憶を入れるために、五歳まで培養液の中で過ごしたというフェイトちゃん。
だからあの子は実質四歳なのだ。昨日のフェイトちゃんは、ある

意味とても年相応な姿だったのである。
そんな、親からの愛情が目一杯必要な時期にあんな話。
歪んでしまったっておかしくない。
病状が安定したら、なんていうのは方便だろう。おそらくは自分の気持ちを整理するための期間が欲しかったんだと思う。
歳に見合わないしっかりとした思考能力を持つフェイトちゃんだから余計に悩むはず。
けれど。
「大丈夫ですよ」
リニスさんは自信満々に言い切る。
「フェイトはきっと受け入れてくれます」
きっと、なんて言いつつ、その表情は絶対の確信を持っていて。
「私が育てた子なんですから」
とても誇らしげだった。
……まあ、もしものときはウチで保護しよう。
お母さんは子供大好きだし、お父さんは絶対お母さんに逆らえない。
それにリニスさんもいる。悲しい顔なんてさせてやらない。
下心なんてないからね。
でも今は。
「礼也！　アンタも早く来なさい。大富豪するわよ！」
急かす大富豪の娘さんに答えながら、ただフェイトちゃんの幸せを祈った。

十二章

「ボクの扱い、酷すぎないかな？」
数時間にわたるバインドから解放されてグッタリしたユーノちゃん。
張本人のはずのリニスさんはフェイトちゃんとお風呂に入っていて、ここには僕一人。
女の子座りでへたり込んだまま込んだまま、じとーっと見上げてくる。
「ボクってさ、君からしたら序盤のすごいお助けキャラだと思うんだ。言うなれば、間接的とはいえ君が魔法を知る原因になっちゃったから、仕方なく弟子にする凄腕魔導師的なポジション」
自分で凄腕言っちゃったし。というか弟子にされた覚えないんだけど。君、基本的なこと教えたらすぐどっか消えたよね。
「結構楽しみにしてたんだよ？　君の成長を後ろから見守って、ここぞという時に助けに入ろうと思ってさ。そしていずれ強くなった君と肩を並べて悪の総本山に乗り込む、って感じの展開を考えてたのに」
悪の総本山って何だよ。なんか変なスイッチ入ってる。突っ込みたいけど、いじけた子供みたいでやり辛い。あ、そのものずばりか。
「なのにさ。君は全然ジュエルシード探そうとしないし、近くで発動しそうだと思ったら一般人に魔法ばらすし。敵っぽいのが出てきたからかっこいいとこ見せようと思ったら邪魔されるし。気付いたら敵っぽいのと仲良くなってるし。いつの間にかボクより強い使い魔と契約してるし。人が縛られてるのにすぐそばで楽しそうに遊びだすし」
どうしよう、この子？　聞いてたら結構かわいそうに思えてきた。最後とかもう泣きそうだよ。
「えーと、そうだ！　おなか空いてるよね？　ご飯作ってあげる

よ」
よく考えたら、この子丸一日何も食べてないじゃないか。そりゃ不機嫌にもなる。とびっきり美味しいのをご馳走してやろう。
「逃げるの？　レイジングハート、返してもらおうかな？」
『百回死んで出直してきやがれ、凄腕魔導師（笑）』
泣かしてどうするレイハ。

なんかいい匂いがする。
おなかがぐ～っと鳴った。
涙を拭って周囲を見渡す。
見慣れない木造の部屋。匂いのする方を見ると、ボクより女の子らしい顔をした男の子の姿が。
「あ、ご飯できたよ。簡単なスープだけど、栄養はたっぷりだから」
ボクを泣かせた張本人のくせに、何笑ってるのさ。
八つ当たり気味にそう思ったけど。
ぐ～。
……まあ、仕方ないから食べてあげよう。
少し力の入らない体を起こして椅子に座る。うわ、近くだとほんとにいい匂い。
「パンもあるから、しっかり食べてね」
対面に座った礼也がニコニコと言う。
スープはトマトベースみたいだ。言葉通り、具がいっぱい入って栄養ありそう。
スプーンで掬って一口。
「……お、おいしい」
なにこれ。すっごくおいしい。むかつく。
貪るようにスプーンを動かす。

気付いたらスープはなくなっていた。
カツン、カツン、とスプーンが器の底をノック。
「気に入ってもらえたみたいで良かったよ。おかわりあるけど、いる？」
……その微笑ましいものを見るような目はやめて。もらうけど。

「よく食べたねえ。全部なくなるとは思わなかったよ」
「悪かったね、食い意地が張ってて！」
五人前くらい食べただろうか？　正直自分でもこんなに食べられるとは思わなかった。
「あはは、ごめん。嬉しくってさ。料理人冥利に尽きるというか」
明るく笑う礼也からは悪い感情は伝わってこない。本気で喜んでいるらしい。
こちらとしてはガツガツ食事するのを見られて恥ずかしいことこの上ないんだけど。
「その、ありがとね。おいしかったよ」
一応お礼は言っておくべきだろう。ほんとにおなか空いてたし。おいしかったし。
礼也はきょとん、とした後どういたしまして、と笑ってくれた。

ユーノには友達がいない。少ないとかそういうレベルじゃなくて、ゼロ。
ユーノは天才だった。弱冠九歳にしてＳ－ランクの神童。それが周囲からの評価。魔力量自体がずば抜けているわけではないが、もはやレアスキルの域にある魔法の超多重展開は誰にも真似できないと言われている。昨日機械兵に撃ったのもそれによるものだ。
子供というものは異質なものを排斥する傾向にある。ちょっと優れている程度なら良かった。けれどユーノの才はまさしく異端といっていいもの。
いじめ、というほどではなかった。それでも周りの子供たちには

怖がられ、怯えられた。親が居らず、拾ってくれたスクライアの部族はあちこちを転々としながらの生活だったから、そうなると友達なんて出来るはずもない。研究者気質の大人たちはユーノの才能など気にしていなかったが、言ってしまえば無頓着なだけ。ユーノの境遇を気に掛ける人はいなかった。

だから、実はユーノにとって礼也は初めてまともに話す同年代の子供だったりする。

というわけで絶賛テンパり中。

な、何話せばいいんだろ！？　よく考えたら大抵怖がられるのって戦ってるの見られときだったよね！？　ど、どうしよう！　あの金髪の子はすごい怖がってたし、ダメかも……

かっこいい熟練魔導師を演じていたときはよかったが、一度メッキが剥がれるとこんなものである。

そんな心中を知ってか知らずか、

「そういえば、ユーノちゃんって今どこに住んでるの？」

当たり障りのない質問。会話の糸口を探していたユーノはそれに飛びついた。

「い、今はねっ、向こうの森のほうにテントを張ってるんだっ」

「……え」

あまり場を和ませる効果はなかったが。

なにか失敗した！？　と、あうあうするユーノに呆れたような声がかかる。

「えーと、まさか野宿してたの？」

「う、うん。そうだよ？」

どこかおかしいとこがあったのだろうか。

「……食事はどうしてたの？」

「携帯食料を持ってきてるんだ」

「……風呂は？」

「公園の水道で……」

ため息つかれた！？

「ユーノ」
「ひ、ひゃいっ！？」
「これからウチで暮らすこと。いいね？　決定事項だから」
……えええええ！？

それからはあっという間。
会う人会う人、といっても礼也の家族だが、全員がウチに住め、と言ってきて、気付いたら風呂に入れられ夕食を頂き、寝床まで与えられていた。
といっても礼也のベッドらしいのだけど。本人は床に布団を敷いている。
同じ部屋というのはびっくりしたけど、初めてのことなのでちょっぴり楽しみ。
なんか友達みたいだよっ！
舞い上がり気味の胸の内を抑えて目をベッドに潜る。今日はちょっと眠れそうにない。
「よし、電気消すよ？」
「う、うん。おやすみ、礼也」
「ん。お休み、ユーノちゃん」
礼也はボクのことをどう思ってくれてるんだろうか？
ふと考える。
きっと怖がってはない。
一緒に暮らそう、なんて言ってくれたし、同じ部屋で寝ようというのだ。それはたぶん確実。
……友達に、なってくれるかな？
聞いてみたいけどどうしても踏み出せない。拒絶されるのが怖い。
友達になってくれなかったらそのときは……専属料理人として誘拐？　あ、いいかも。意思を奪うロストロギアがあったはずだし。
でもレイジングハートとあの使い魔は要注意だなあ。使い魔は四六時中一緒にいるわけじゃないにしても、レイジングハートは厄介

だ。今日見てた限りじゃ風呂にも付けていってたし、今も付けたままだ。ボクが誘拐しようとしたら絶対に邪魔するだろう。嫌がるのを無理矢理使おうとしてたからか、すごい嫌われてるし。遺跡に埋まり込んでたのを見つけたのはボクなのに。

となると、どうやってレイジングハートを引き離すか、だね……

微笑ましい悩みが一体どういう思考回路を辿ったのか。

いつの間にか誘拐の手口を考え始めたユーノの横で、礼也は謎の悪寒に震えるのだった。

十三章

「リニスさん、どう？」
街の遥か上空に浮かびながら尋ねる。
ユーノちゃんがウチに住むことになった翌日。
学校が終わり、習い事のあるアリサたちと別れた僕は、ジュエルシードを探して回っていた。
探査魔法を使っているのはリニスさんだが。
何を隠そう、僕はこういった系統の魔法の適正が皆無なのである。一応使えるけどほぼ意味がないっていう意味で。魔力だけなら腐るほどあるのに。
だからユーノちゃんに任せようと思っていたんだけど、リニスさんがいるなら話は別だ。
「ふむ、当たりですね。一つですが反応がありました。今から絞込みます」
リニスさんは超有能。今だって光学迷彩みたいな魔法を維持しながら、涼しい顔でジュエルシードを捕捉しようとしてる。
その横でただ浮いてるだけの僕。うん、カッコ悪い。暇だし。
といっても何も出来る事はないのでぼんやりとリニスさんを観察。服装、というかバリアジャケットは初めて会ったときと同じデザインだ。
出来れば翼を付けたかったが、邪魔ですから、と一蹴された。
普段は友達のお母さんみたいな印象だからあまり意識しないけど、こうして見ると本当に美人さん。
猫形態はさぞ可愛いだろう。そのうち頼んで見せてもらおうかな。
益体もないことを考えていると。
「見つけました」
「おお、早いね。ユーノちゃんが取り逃がしてるとこだから、もっと大変かと思ってたけど」

「プレシアの魔法は秀逸ですからね。限定付きとはいえ、あれでSSランクの大魔導師ですから」
ジュエルシードの数は全部で二十一個。手元に十二個あるから残りは九つだ。フェイトちゃんは一つも見つけられなかったらしいし。
短期間にそれだけ見つけたユーノちゃんに見つけられなかったジュエルシードを、開始十数分で探し当てたのだからそのすごさは推して知るべし、だ。
しかしリニスさんは自慢げな様子など一切見せずに、ただ、と続ける。
「どうも排水溝の中に落ちてるみたいで。周囲に人が多いですし、夜になってから回収に来ましょう。幸い、暴走の気配はありませんし」
「分かった。じゃあ、一旦帰ろっか」
回収するだけなら無邪気な子供を装えばなんとかなるかもしれない。
けれど僕たちがしようとしていることには、結界の展開が必要不可欠なのだ。それには魔力光を目撃されないように人目の少ない時間帯を選ぶ必要があった。
そもそもなぜ役に立たない僕がここにいるかというと、レイハの提案が原因だったりする。

「魔導師襲撃事件？」
学校からの帰り道。急に慌てた様子で話し出したレイハの言葉に首をひねった。
『はい。今から六ヶ月ほどあとに、歴戦の魔導騎士による連続襲撃事件が起こる可能性があります』
いつになく真剣なレイハにこちらも放課後で少し浮ついた気分を消していく。
『魔力を持つ存在が対象となります。桁外れな魔力を持つマスタ

ーが狙われるのはほぼ確実かと』
「時空管理局は？　聞いた話じゃ、そういうのも取り締まってるらしいけど」
周囲に人はいないが、一応小声で尋ねる。念話で話せばいいのだが、会話してる気がしないからなんとなく嫌なのだ。
『時空管理局に、襲撃者に敵う人材はほとんどいません。そのわずかな人材も様々な任務で手が離せないのが現状です。数多くの次元世界を股にかける組織ですから、万年人手不足なんですよ』
「ああ……そういえばそんなことも言ってたねえ」
魔法が認知されている世界でも、実は戦闘に耐えうるレベルの魔力持ちというのは案外少ないらしい。しかし管理局は質量兵器、この世界で言う銃火器、刀剣類を禁止しているので、戦力は魔導師のみ。その中でも優秀な魔導師は当然引っ張りだこになる。
時空管理局の役割を考えると、質量兵器の禁止自体はなかなかうまい考えだろう。
まず戦力の管理が楽。質量兵器と違って魔導師はポンポン増やせるものじゃない。そして生まれた魔導師を管理局に引き込めれば相対的な戦力はぐんと上がる。そもそも核兵器一発で管理局が壊滅する可能性だってあるし。
次に金銭的な問題。管理局はそれほど潤沢に資金があるわけではないらしい。ならば少数で強大な戦力となりうる魔導師は人件費の大幅な節約に繋がる。しかも質量兵器は開発費、製造費、維持費と必要な金額が馬鹿にならない。使うたびに消費するのだから、練習一回でも莫大な金額が飛んでいく。管理局の規模に見合わない資金力を考えると使えるはずがなかった。そして管理局が使えないのなら管理する世界にも使わせるわけにはいかない。
最後に建前にしている魔法のクリーンさ。確かに大量破壊兵器なんかを考えると、よっぽどマシかもしれない。魔力を全放出すれば日本が消えるかもしれないと言われた礼也にしてみれば微妙なところだが。

まあ他にもあるかもしれないが、今はどうでもいい。
とりあえず管理局が人手不足なのは理解できる。でもそれで事件に対応できなかったら意味ないと思うんだ。
「……今から何か備えられることはある？」
うだうだ言っても仕方ないので思考を切り替える。さすがに襲ってくると分かっているものを座して待つほど物好きではない。
『そうですね……当面は実戦経験を積むことでしょうか？　先にも言いましたが、相手は歴戦の猛者です。訓練は見ていましたし、マスターの強さは分かっていますが、下手すれば気付くことすら出来ずにやられてしまう可能性もあります』
「実戦経験、ね……」
レイハの言葉に苦い思い出が蘇り、思わず言葉に詰まってしまった。
実戦……命の取り合いの経験なら、ある。嫌になるくらいに。
もう関わらないって決めたんだけどなあ。
内心で愚痴るが、顔にはおくびにも出さない。レイハに、というか一人を除いては誰にも前世の記憶のことは喋っていないのだ。要らぬ心配はかけたくなかった。
ちなみにその一人というのが月村家のメイド長、ノエルさん。我ながらなんで話したのか未だによく分からないけど。
それはともかく。
「どうするの？　実戦なんてこの世界じゃそうそう経験するものじゃないよ？」
そうそう、というか日本ならまずないだろう。表なら、という条件はつくが。とはいえ実戦経験を積むためだけに裏社会に入る気などさらさらない。
だが。
『少し、考えがあります』
珍しくも悩みながら話すレイハ。
『ジュエルシードをの暴走体と、戦ってみませんか？』

僕の、魔導師としての初戦の相手が決まった。

深夜。
人気の途絶えたビル街に、二つの影があった。
言うまでもなく礼也たちである。

「準備はよろしいですか？」
杖を構えるリニスさん。
最初は反対していた彼女だが、レイハの説得によって協力してくれることになった。
ちなみにユーノちゃんとフェイトちゃんには秘密だ。
「うん、いいよ」
答える僕も既に杖を手にしている。
ウチの人外じみた家族としょっちゅう為合っているので勘は衰えていないと思うが、油断する気はない。
心は鉄に。頭は機械に。
頭の奥がスッと冷える。視野が広がる。余計な力が抜けていく。
「では、いきます」
リニスさんの結界が広がり、同時にジュエルシードの在り処へ魔力流が撃ち込まれた。

魔力流を撃ち込んだ後、すぐにその場を離れる。
今回の私の役目はジュエルシードの暴走体を意図的に生み出し、主である礼也と戦わせること。
使い魔としては非常に不本意だが、レイハの話が事実なら確かに必要ではある。
襲撃者はSランク周辺の強力なベルカの騎士四人。多少は戦える

自信があるけれど、礼也を守りながらでは難しい。荒修行でもモノになってもらわねばならなかった。
礼也の眼前で黒い歪な魔力塊が蠢きだす。
バリアジャケットを展開した、見た目だけなら天使っぽい礼也と相俟って非常に不気味だ。
思念体、だったか。それほど強い力は感じないが、初陣の相手にしては荷が勝ちすぎるのではないだろうか？
懸念を余所に魔力塊は毛玉のような形で落ち着き、その中心部に一対の紅い光が灯った。
「ご武運を……」
祈るような気持ちで呟く。
リニスは子供が好きだ。それを、自分の力不足で危険な目に合わせるのが、なんともやりきれなかった。
しかし。
「……え？」
次の瞬間、目に入ったのはあまりに予想外の光景。
既に思念体の姿はなく、そこにいるのは杖を突き出した姿勢で止まった礼也のみ。
何が、起こったの？
『少し相手が弱すぎたようですね』
「冷静に言わないでよ。あー、びっくりした。確かに速く移動できるように、って言ったけどさ。限度があるでしょ」
呆然とする彼女の耳に入ってくる主とそのデバイスの声。
『マスターが反応できる速度の限界は把握しています。ちゃんと倒せたじゃないですか』
「倒したっていうか、衝撃波で吹っ飛ばしたみたいになったけどね。ジュエルシードどこいったよ」
『さあ？　あ、落ちてきましたよ……あら、割れちゃってますね。マスターの突きは直撃だったようです』
「うげ、狙い通りなのはいいけど、そんなに簡単に壊れるものだ

ったのか。ユーノちゃんに何て言おう？」
『正直に言えばいいと思いますよ？　どうせ封印予定のものです。それに同じものがあと二十個ありますし』
聞こえてきた会話からすると、どうやら高速移動魔法を使って一突きで倒したらしいが……
馬鹿な。
そんな感想しか出てこない。魔法の発動を全く感知できなかった。感じたのは莫大な魔力の放出のみ。
そこまで考えてふと気付く。
もしかして、魔力に指向性を持たせて一気に放出することで爆発的に加速した？
突拍子もない考えだが、異常な魔力を持つ礼也とあのトンデモデバイスなら可能かもしれない。
それに魔法の発動を感知できなかったのも説明がつく。なんせ、魔法ですらないのだから。
「そうするかあ……リニスさん、帰ろっか」
「は、はい」
割れたジュエルシードを拾い、呑気に言う礼也。
なんにせよ、礼也が無事でよかった。
そう、胸を撫で下ろした瞬間だった。

『後方に転移反応！』
「！？　礼也、危ない！」
突如現れた人影が礼也に襲い掛かる。
ガキィィ！
「一体どこの誰さ……いきなり襲い掛かられる覚えはないんだけど？」
その斬撃を危なげなく受け止めた礼也に安堵するが、ちょっと機嫌が悪そう。
「くっ……！」

一撃で仕留められなかった襲撃者は悔しそうにしながら礼也から離れた。
「女の子？」
少し離れたところに着地したのは奇抜な格好をした十二、三歳ほどの黒髪の少女。
琥珀色の瞳がキッと睨んでくる。
まず目に入るのは青と白の大きな帽子だろう。
しかしそれ以上に特徴的なのが、
「ぜ、全身タイツ、だと……！？」
礼也の言葉通り。頭と手だけは出ているが、その全身を覆うのはぴっちりとした黒タイツのみ。一応申し訳程度に上着と小さなマントが肩にかかっているものの、体の前面はまるで隠れていない。
「リニスさんを超える猛者がいたとは……」
「な！？　失礼なこと言わないでください！」
「前留めてるかどうかしか変わらないじゃないか」
「そこが大事なんです！」
なんですかそのやれやれ、みたいな顔は。夜目効くんですから、バッチリ見えてますよ？
「貴様ら、バカにしているのか……？」
ちょっと無視される形になった少女がデバイスらしき細身の剣を構え直す。低い声。間違いなく怒ってます。
「いや、風俗の違いに驚いただけですよ。気を悪くしたならごめんなさい。それで、貴女は？」
それに宥めるように返す礼也。
絶対嘘ですよね。まあ、荒事にならないならそれに越したことはないですけど。
「ふん！　よく聞け、ロストロギアを狙う悪党ども！」
ありゃ、無理っぽいですね。あきらかに勘違いしてます。聞く耳もなさそうですし。
「時空管理局執務官、クロエ・ハラオウンだ！　貴様らの根性を

叩き直してくれる！」
……不味いかもしれません。

十三章（後書き）

二人目のＴＳキャラ。名前は誤字ではないです。そして年齢で分かると思いますが、復讐は考えてないです。主人公刺したらレイハが暴走しそうなので。モデルは有名だと思うけど、分からなくても問題ありません。

十四章

ガガガガガ！
金属同士が擦れ合う不快な音。
電灯の頼りない薄明かりの中、黄色い火花が散る。
すごい。
連続で襲い掛かってくる突きを捌きながらちょっと感心した。
この少女、ワケ分かんない癖に強い。
突きの速さも目を見張るものがある。でもそれ以上に剣を引く速さが尋常じゃない。そのせいでとんでもない手数になっている。
狙いも腕や足への牽制の中に急所への必殺が織り交ぜられていてかなり巧い。
魔法でブーストしているみたいだけど、よほど基礎がしっかりしているのだろう。なかなか軸がぶれない。
間違いなく強い。でも。
「お父さんたちほどじゃないかな」
「くあっ！？」
一際大きな突きを受け流し、わずかに泳いだ上体へ横薙ぎの一撃。
体勢を崩した少女に魔力を籠めた蹴りを入れる。
確かに強いけど、甘い。どんなにすごい突きでもあれだけ見せられたらさすがに見切れる。
正直すぎるのだ。
フェイントを入れるなり、隙を他の魔法で埋めるなりすればいいのだけど、どうも頭に血が上りすぎているようだ。なんでこんなに怒ってるんだろう？
まあなんにせよ、これで終わり。
うずくまる少女の首筋を刈ろうと……って、ダメだよ！
あ、危な！？　この娘、管理局って言ったよね！？　警察叩きのめしてどうするのさ。

慌てて離れる。
うずくまったままの少女にリニスさんのバインドがかかった。
「ありがと、リニスさん」
「いえ、もっと早く捕まえられたらよかったのですが……」
ああ、僕がずっと密着してたからね。しょうがないよ。
『ふむ、まずは合格ですね。でもちゃんと魔法使ってください。捕縛盾一発で終わったはずですよ？』
「ごめん、つい癖で。っていうかこの娘、どうしよう？　管理局なんだよね？　なんか正義の組織らしからぬ奇襲かけてきたから思わずやっちゃったけど」
腹部にダメージを貰って悶絶している少女。
ほんとにどうすればいいんだろう？　あきらかに勘違いしてたけど、かといって警官に攻撃するのも相当不味い気がする。
『とりあえず一旦解放して、もう一回戦ってみませんか？　今度は魔法で叩きのめしましょう』
「いや、ダメだからね」

『そうですねぇ、それは困りますわ』

「……誰？」
レイハとの会話に紛れ込んできた第三者の声。
なんだろう？
柔らかい感じなのに、妙に怖い。
空中にモニターが現れ、エメラルドグリーンの髪をした若い女性の姿が映し出された。
『時空管理局提督、リンディ・ハラオウンです。まずは謝罪を。そちらのクロエ執務官の非礼を詫びさせていただきます』
年齢はリニスさんと同じくらいだろうか。真剣な表情で頭を下げてくる。
『クロエ執務官。貴女も』

「ひゅー、ひゅー……げほっ、ハァ、ハァ、ハァ……か、艦長、何を!?」
『何を、じゃないでしょう？　貴女の独断専行は今に始まったことじゃないけれど、今回は貴女が一方的に悪いわ。そちらの方たちは管理局所属の現地協力者よ？』
「なっ!?」
女の子、クロエちゃんも驚いてるけど、僕も初耳だよ。
（「レイハ、なんかやったの？」）
こういうときはレイハに聞くのが一番確実な気がする。
（『はい。この前管理局のネットワークに侵入しまして。実は管理局には脳だけで生きてる高官がいるんですが、その脳がネットワークに繋がってるんです。それをちょちょっと弄って洗脳してみました』）
……やっぱり聞かなかったことにしよう。
「そ、そうだったのか。すまない。てっきりロストロギアを狙う犯罪者かと」
「あ、いえ！　全然気にしてませんよ！　大丈夫です」
リニスさんのバインドが解けたクロエちゃんが謝ってくれるのが、すんごい居た堪れない。
『感謝します。さて、高町礼也特務官』
特務官ってなんだ。突っ込みそうになったが、ハラオウン提督の顔を見て意識を完全に切り替えた。
『ユーノ・スクライアの要請を受けてロストロギア回収に出向して参りました。現在の状況を聞かせていただけますか？』
似たようなタイプをよく知ってる。
不自然なまでに自然な表情。計算しつくされた所作。全く感情を読ませない目。
最初怖いと思った理由が分かった。
これは下手なこと言えない。
「了解しました。ユーノ・スクライアにも連絡いたしますか？」

『ええ、お願いしますわ』
よく打ち合わせしないと。

「そう、残り八個ということね」
「はい。おそらく大部分は海じゃないかなぁと。ちょっと個人では無理そうなので要請を出させてもらいました」
時空管理局・巡航L級8番艦アースラ艦長室。
とりあえず眠っていたユーノちゃんをたたき起こして事情を説明した後、僕、リニスさん、ユーノちゃんの三人でここにやってきた。
でっちあげた話はこう。
事故で海鳴市に散らばったジュエルシードの回収を図ったユーノちゃんは、管理局から紹介された僕と共に回収活動を開始した。それだけの単純な話。
フェイトちゃんの襲撃とかはなかったことにした。
そして僕の魔導師となった経緯は、倒れていた管理局職員を家で保護した際に目を付けられた、という設定。年齢的に親から離すことはできないが、才能を埋もれさせるのも惜しい。ならばその場で魔導師として教育すればいいのではないか。そう考えた職員が上層部に掛け合った結果、有人の管理外世界での魔法的事件に迅速に対応するためのテストケースとして教育を受けることになった。その教師役がかつての大魔導師で、フリーになっていたプレシア・テスタロッサである。
我ながら無茶のある設定だけど、テスタロッサ家の事情さえ隠せればいいのだからこれで押し通す。
プレシアさんの経歴とかはアリシアちゃんを生き返らせたときにレイハが手を回してるから問題ないはず。ジュエルシードがばら撒かれる原因になったプレシアさんの攻撃は、ばれなきゃ犯罪にならないしね。ふふふ。

ユーノちゃんの説得が大変かと思ったけど、お願い、って言ったらなぜか一発で頷いてくれた。
……しかしこの部屋の内装は何なんだろうか？　きっとテーマは『ザ・日本かぶれ』。こっちを落ち着かせるため？　むしろ逆効果です。
ハラオウン提督は正座を保ったまま緑茶を口にし、考え込むように目を閉じる。
あ、砂糖追加した。それで三つ目だよね？
砂糖を溶かし、一口飲むと、ようやく好みの甘さになったのか嬉しそうに笑った。
あら可愛い……じゃない。やっぱりこの人面倒くさいタイプだ。全然ペース握れそうにないし、何割か嘘も見抜かれてる。僕じゃなくてユーノちゃんに聞かれちゃったからなあ。気付いてるのがこの人の見過ごせる範囲であることを祈ろう。幸いユーノちゃんはプレシアの犯罪とか、レイハがやった蘇生は知らないし。知ってるのはテスタロッサ家が訳あり一家ってことと、もう介入してくる意思がないってことだけ。これなら大丈夫、かな？
「では、海の調査はこちらで請け負いましょう。陸上の調査は引き続きそちらでお願いします。クロエ執務官もそちらに回しますね」
うん。見逃してくれそう。
内心でホッと一息ついていると、
「姉さ、艦長！？　なぜ私が？」
ハラオウン提督の横で小さくなっていたクロエちゃんが反応した。
「貴女、彼に負けちゃったじゃない。しばらく稽古つけてもらいなさい」
そう言ってこちらにウインクしてくるハラオウン提督。詳しいことは聞かないから協力しろ、と。
それくらいで済むなら御の字だ。たぶん抱えてる事情がそれほど危険性のあるものじゃないことを察してくれたんだろう。そういうとこは楽でいいけど、どうせなら何にも気付かないでほしいよ。

「いいですね。僕も稽古の相手が欲しいので、付き合ってもらえませんか？」
「う、うむ。そういうことなら、よろしく頼む」
「こちらこそ……あ」
「？」
そういえばクロエちゃんの顔ちゃんと見るの、これが初めてだ。バリアジャケットのときは全身タイツしか印象なかったし、アースラに乗ってからはハラオウン提督しか見てなかった。
だから今気付いた。
「君、この間大通りで男の人ボコボコにしてた子じゃないか」
「う゛……」
「……クロエ？」
アースラに少女の絶叫が響き渡った。

十四章（後書き）

リンディさん十代未婚。けど階級は提督。七、八歳で親を殺され、復讐のために頑張ったという設定。新キャラ出す度にグダグダになるのは仕様かも。

十五章

「お兄ちゃん、起きて。朝だよ」
耳慣れない呼び声で目が覚めた。
アースラから戻ったのが三時くらいだったからひどく眠い。今日は弁当は作れなさそうだ。
寝ぼけた頭を振りながら体を起こす。
「……フェイトちゃん？」
「うん。おはよう、お兄ちゃん」
起こしてくれたのはフェイトちゃんらしい。丈の短い黒のワンピース。白い素足が眩しい。
「おはよう……何でお兄ちゃん？」
「リニスがそう呼ぶようにって」
なぜに。
こんな可愛い妹なら大歓迎だけども。
「フェイト、礼也は起きましたか？」
噂をすれば。
開きっ放しのドアから、エプロン姿のリニスさんが顔を出す。花柄のエプロンにコック帽はミスマッチかも。
「おはようございます。眠いでしょうけど、ちゃんとご飯食べてくださいね」
「うん、おはよう。それより純真なフェイトちゃんに何教えてるのさ」
そういう趣味はないんだ。お兄ちゃん、なんて呼ばれても……嬉しいけどさ。
「？　ああ、そのことですか。フェイトはアリシアの妹ですからね。将来の義妹になりますし、いいじゃないですか」
「……その言い方じゃ僕がアリシアちゃんと結婚することになるじゃないか」

なにその意外そうな顔。違うんですか？　じゃないって。どこからそんな話が出てきた。
「契約に『生涯共にあること』ってありましたよね？　プロポーズじゃなかったんですか？」
知らないよ。そもそも契約ってなんだ。
「アリシアも満更ではなさそうでしたし……ハッ、まさか私もですか！？　使い魔としてだと思ってましたけど……わ、分かりました。それがお望みなら」
「だからなんの話！？」
『彼女たちへ魔力リンクを繋ぐ際にそういう契約を盛り込んだんです。これで彼女ができなくても安心ですよ！』
……そういうことね。
「大きなお世話だよっ！？」
しかもそれじゃあ僕、鬼畜じゃないか。
『ご心配なく。そこまでの拘束力はありませんので。効果はせいぜい友人であり続けること、くらいのものです。そこから恋愛に発展していけばいいなあ、と』
それならいい、の？　というか。
「……僕ってそんなにもてそうにないの？」
デバイスにそんな心配されるレベルなのか？　泣くぞ。
『いえ、その……以前のマスターがずっと独り身でやさぐれてましたので、今回はそういうことがないように、と』
「そう、なんだ……」
なんとも言えない空気が流れた。

「いってらっしゃい」
桃子たちが出て行き、広い家が静かになる。
今この家にいるのは私とリニス、そしてまだ寝てるユーノという

子だけだ。
あの子はまだ起こさないでおこう。礼也はただの寂しがり屋の女の子って言ってたけど、まだちょっと怖い。それに昨日は遅くまで起きてたみたいだから。
管理局が来た。そう聞いたときは捕まるかと思ったけど、礼也もユーノも私のことは隠してくれたらしい。
確かに私は襲おうとしただけで何も出来てない。でもジュエルシードを積んだ船を攻撃したのは母さんだ。礼也にそれを問い詰めたら、ユーノちゃんには秘密ね、だって。
また助けられたんだ。
嬉しいような、申し訳ないような。
最初に会ってから助けられてばかりの気がする。思い出したら顔が熱くなった。
うぅ、あれはいまだに恥ずかしい。幼児みたいに甘えた記憶ばっかり。
あんなに甘やかす礼也が悪いんだよ。まったく。
でもそのおかげですごくホッとしたのは確か。たぶん礼也がいなかったら腰を抜かしたまま泣きじゃくってた。
そして気付いたら二度と会えないと思っていたリニスがいて。これも礼也のおかげ。
リニスにはいろんな話を聞いた。母さんのこと。アリシアのこと。私のこと。
正直、ショックだった。
私を見る度に一瞬悲しそうな顔をしてた母さん。
なんでだろう、って。ずっと思ってた。その理由が分かったんだ。
私を通してアリシアを見てたから。
ずっと私を見てくれてなかった。私はアリシアの代用品でしかなかった。そう、思い知らされた。そもそもマトモな人間ですらないんだから。
気にしてないよ。

そう言って笑ってみたけど、たぶん変な笑顔になってたと思う。リニスがぎゅっと抱きしめてくれて、その腕の中でちょっと泣いた。一晩置いてからまたゆっくり話しましょう。ずっと一緒にいてあげますから。リニスはそう言ってくれたんだけど。

整理しきれない感情を一旦放り出して、礼也たちと遊んで、いっぱい笑って。やっと巧く笑顔を作れるようになったかな。そう思ったときに小さな声で言われたんだ。

「僕たちは、『フェイトちゃん』の友達だからね」

字面だけ見ればなんでもない平凡な言葉。その言葉で不思議なくらい心が軽くなった。

涙腺まで緩みそうになったから頑張って我慢して、お風呂でリニスと一緒に泣いたんだっけ。その辺は記憶が曖昧。いつの間にか寝てたみたいで、起きたらだいぶ気持ちの整理がついてた。

私は「F．A．T．E」じゃない。私はフェイトだ。礼也たちの友達。でも、どうしても、って言うならフェイト・テスタロッサになってあげてもいいよ。

母さんとリニス。アリシアと私。それにアルフ。みんなで仲良く暮らせるならすごく嬉しい。

リニスが言うには礼也も家族になるらしいし。アリシアが礼也のお嫁さんになるんだって。私も、なりたいな。

……あ、アルフどこいったんだろう？

急に赤面したり、沈んだり、エヘヘってやったり、かと思えばオロオロしだしたり。

忙しく表情を変えるフェイトに癒されながら、リニスは掃除に取り掛かった。

消音魔法を使って掃除機をかけていく。最初掃除機を使ったとき、あまりの音に思わず逃げ出したのは秘密。

それにしても、と。気付かれないようにこっそり嘆息する。
フェイトはすっかり元気なようです。
ゆっくり、時間を掛けて立ち直ってもらおうと思っていたのに、一体どんな反則技を使ったのだか。
ちょっぴり悔しいけれど、それ以上に嬉しかった。
救世主サマ。アリシアはふざけてそう言いましたが、テスタロッサ家にとっては真実その通りかもしれません。返しきれない恩があります。
だから私は一生使い魔として尽くそうと決めたのですし、アリシアなんて結構本気で結婚まで考えているのですから。といってもアリシアの場合、恩返しは建前でしょうけど。
幽霊の体というのは、人の感情に酷く敏感でした。だから惹かれたのでしょう。私たちのために心から泣いて、心から笑ってくれた礼也に。でなければ使い魔の私はともかく、元人間のアリシアがあんな契約を受けるはずがありません。まあ、その契約の拘束力というのは拍子抜けするくらい弱かったのですが。
もうちょっと大きくなったら考えてあげよっかなー、なんて言っていましたが、二年も一緒にいたのです。睡眠時間などありませんから、体感的には三年くらい。それだけの時間を二人っきりで過ごしたのですから、アリシアのことなら大体分かります。変なところで恥ずかしがり屋なんですから。
私にとってアリシアは妹のような存在。礼也相手なら問題ありませんし、精々応援させてもらいましょう。今から始めればきっと大人になる頃にはすっかり嵌っているはずです。ちょっとフェイトも怪しいですが、そのときは姉妹揃って貰っていただきましょうか。
どうしましたか、フェイト？　ああ、アルフですか。まだ病院にいるんじゃないでしょうか？

十五章（後書き）

超難産。ちなみにフェイトは結婚のことよく分かってない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7479y/

僕、生きて帰ったら翠屋を継ぐんだ……

2011年12月1日01時53分発行